

CCMC 2026

Contemporary Computer Music Concert

「多様性豊かなアコースマティック音楽の現在」
マルチ・チャンネル・スピーカー・オーケストラによる
アコースモニウム・コンサート
ワークショップ
レクチャー



2026年2月21日(土) 22日(日)
同志社女子大学京田辺キャンパス(京都)
頌啓館ホール K101/K123

主催：音と音楽創作工房 116

協力：MOTUS Compagnie Musicale

助成：公益財団法人かけはし芸術文化振興財団



〈プログラム//Program〉

2月21日（土）

12:00～ K113

レクチャー 1/Lecture1 講演者/Speakers :

L1-1. 佐藤亜矢子/SatoAyako 「《Journal M》と場所 —リュック・フェラーリのマドリードでの足跡を追って—」

L1-2. 田中 敬一/Tanaka Keiichi 「個人活動家、クリエイターにとってのカンファレンス（自己紹介）と交流会というスタイルについて」

L1-3. 宮木朝子/Miyaki Asako 「Outerscape—外的風景」

L1-4. 渡辺愛/Watanabe Ai 「電子音楽におけるアーカイブの方法論——JSEM アーカイブの研究報告」

14:00～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 1/Acoustic Music Live Concert 1 :

1-1. 足本憲治/Ashimoto Kenji 「となりの住人/The Neighbor」

1-2. かつふじたまこ/Katsufuji Tamako 「私のおうちを壊さないで/Don't Destroy My Home」

1-3. 佐藤亜矢子/Sato Ayako 「Journal M」

1-4. 宮木朝子/Miyaki Asako 1)「水滴のエチュード/Etude of water drop」 2)「フェニキアの不死鳥/Phoenix in Phoenicia」

1-5. 渡辺愛/Watanabe Ai 「和歌/Waka」

15:00～ K101 ホール

公募入選作品コンサート A/Concert A Works Selected by CCMC :

A-1. ドミニク・ラバテル/Dominique Rabatel 「BABELOUED」 演奏/Interpreter: 渡辺愛/Watanabe Ai

A-2. ジュゼッペ・タッフィ/Giuseppe Taffi 「Elastic Friction」 演奏/Interpreter: 高野大夢/Takano Hiromu

A-3. ホワン・カルロス・バスケス/Juan Carlos Vasquez 「The Unheard Remain」 演奏/Interpreter: 大久保雅基/Ohkubo Motoki

A-4. エドワード・デカイセル/Edward Dekeyser 「蒸発/Johatsu」

A-5. ハク・インキ/Bai YunQi 「もし僕を見つめたなら/If You Look at Me…」 演奏/Interpreter: 大久保雅基/Ohkubo Motoki

A-6. チン・ファーミン/Qin Faming 「A Voice Intolerable To Heaven And Earth」 演奏/Interpreter: 大久保雅基/Ohkubo Motoki

16:00～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 2/Acoustic Music Live Concert 2 :

2-1. 坂野伊和男/Banno Iwao 「osmosis」

2-2. 花澤昴/Hanazawa Subaru 「Raydistorter」

2-3. 高橋哲男/Takahashi Tetsuo 「フィールド・レコーディングと境界/Fieldrecording and boundaries」

2-4. 田中 敬一/Tanaka Keiichi 「視覚の緊張/Tension of Vision」

2-5. 長瀬元應/Nagase Gen 「Fragments 2023-25」

2-6. 守谷悠吾/Moriya Yugo 「透明なものの限界/The limits of transparency」

17:15～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 3/Acoustic Music Live Concert 3 :

3-1. 渡邊裕美/Watanabe Hiromi 「アクア/Aqua」

3-2. 森田信一/Morita Shinichi 「Trio 1」

3-3. 田代啓希/Tashiro Hiroki 「月のとぼり/Shroud of the Moon」

3-4. 牛山泰良/Ushiyama Taira 「ふおん/FUON」

3-5. 高野大夢/Takano Hiromu 「Circulatory Field」

3-6. ヴァンサン・ロブフ/Vincent Laubeuf 「Devenir-eau (2016)」 演奏/Interpreter: 高野大夢/Takano Hiromu

18:30～ K113 ディスカッション/Discussion 司会/Moderator : 柴山拓郎/Shibayama Takuro

19:10～ K110 懇親会/Social Gathering

2月22日（日）

10:00～ K123 ワークショップとデモンストレーション

「アコースモニウム演奏法」/ Workshop & Demonstration 「Interpretation of Acousmonium」:

檜垣智也 /Higaki Tomonari

12:00～ K113

レクチャー 2/Lecture2 講演者/Speakers:

L2-1. 大久保雅基/Ohkubo Motoki 「AI を用いたサウンド・インスタレーションにおけるエージェンシーとテクノ・アニミズム」

L2-2. 岡田智則/Okada Tomonori 「「菜の花をたどって」活動報告」

L2-3. 林恭平/Hayash Kyohei 「電子音響音楽と偶然性の問題(序章)」

L2-4. 檜垣智也/Higaki Tomonari 「アコースモニウム演奏のストラテジー～ドニ・デュフル「Liebestod」を題材に」

14:00～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 4/Acousmatic Music Live Concert 4:

4-1. 由雄正恒/Yoshio Masatsune 「無一物中無尽蔵/Inexhaustible in nothingness」

4-2. 岡田智則/Okada Tomonori 「リュウグウノツカイ/Oarfish」

4-3. 大塚勇樹/Ohtsuka Yuki 「Fragmentary Passage (sluggishness)」

4-4. 山口真希子/Yamaguchi Makiko 「子供と-1歳3ヶ月/ avec mon enfant - 1an et 3mois」

4-5. 上野航/Ueno Wataru 「冷たい入江の足音/Footsteps in the cold cove」

4-6. 大久保雅基/Ohkubo Motoki 「アームチェア・レイブ/Armchair Rave」

15:15～ K101

ホールアコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 5/Acousmatic Music Live Concert 5:

5-1. 岡本久/Okamoto Hisashi 「私が聴いたものたち 7/The ones I listened to - 7」

5-2. 林 恭平/Hayashi Kyohei 「放蝶園/Butterfly Garden」

5-3. ジョルダ・ダヴィド/Jorda David 「初めてのエレクトロアコースティック散歩/Première promenade
électroacoustique」

5-4. 成田和子/Narita Kazuko 「クジラの哀歌/Élégie de baleines」

5-5. 檜垣智也/HIGAKI Tomonari 「「夕立」と「水の上」(『夏八景』より)/“Evening Shower” and “On the Water” (from
Summer Eight Scenes)」

5-6. ドニ・デュフル/Denis・Dufour 「Liebestod」 op. 194 (2024) Cycle *Les Acousmalides* 演奏/Interpreter: 檜垣智也
/HIGAKI Tomonari

16:30～ K123

公募入選作品コンサート B/Concert B Works Selected by CCMC:

B-1. マイク・バーナスキー/Mike Vernusky 「極渦/A Polar Vortex」

B-2. ルカ・ムッチ/Luca Mucci 「Quando Gli Dei Erano Astri」

B-3. シン・ボギョン/Bokyung Shin 「SiLent ≈ LiSten」

B-4. 都築健司/Kenji Tsuzuki 「Dull Weather」

17:30～ K123

公募入選作品コンサート C/Concert C Works Selected by CCMC

C-1. 矢島豪/Yajima Goh 「風の見えない風景/Invisible scenery of the wind」

C-2. 蘇曉宇/SUXIAOYU 「----- --... ...- (0574)」

C-3. 永田風薫/Nagata Fuka 「錬金術の黎明/Genesis of Alchemy」

C-4. オウ・コウビン/WANG HANGBING 「“Caving” for fixed media」演奏/Interpreter: 檜垣智也/HIGAKI Tomonari

C-5. ダイ・メイ/DAI MING 「The Traveling Butterfly」演奏/Interpreter: 檜垣智也/HIGAKI Tomonari

C-6. Yu Chung Tseng 「バンブーのメタスケープ/Metascape of Bamboo」演奏/Interpreter: 檜垣智也/HIGAKI Tomonari

〈プログラム//Program〉

2月21日（土）

12:00～ K113

レクチャー 1/Lecture1 講演者/Speakers :

L1-1. 佐藤亜矢子/SatoAyako 「《Journal M》と場所 —リュック・フェラーリのマドリードでの足跡を追って—」

概要/Summary:

場所に関心がある。さまざまな場所へ赴き、土地土地で録音した環境音・現実音を用いて作品を制作することで、自ずとその場所と自分とのつながり、音とのつながり、社会とのつながりを意識せざるを得ない。こうした興味のもとには、リュック・フェラーリの存在がある。本発表では、フェラーリによるマドリードを舞台としたラジオフォニック作品《盲人の階段》へのオマージュとして作曲した《Journal M》をとりあげ、場所について改めて考える。

L1-2. 田中 敬一/Tanaka Keiichi 「個人活動家、クリエイターにとってのカンファレンス(自己紹介)と交流会というスタイルについて」

概要/Summary:

現代のインターネットやマスメディアに見られる一方向的な情報伝達が、個々人を「無名の大衆」として孤立させている現状と、双方向でフラットな交流形式や小規模な集団における共存共栄のコミュニティについての知見

L1-3. 宮木朝子/Miyaki Asako 「Outerscape-外的風景」

概要/Summary:

2025年に体験した”Outerscape-外的風景”(種子島、サハラ砂漠)における 音楽・音響制作についての報告。
-満天の星空のもとで -種子島宇宙芸術祭 -茫漠たる砂漠における聴覚体験から

L1-4. 渡辺愛/Watanabe Ai 「電子音楽におけるアーカイブの方法論——JSEMアーカイブの研究報告」

概要/Summary:

日本電子音楽協会(JSEM)では1992年から演奏会を41回開催し、延べ274作品を発表してきたが、これまで演奏会の記録をまとめて保管・整理していなかった。そこでアーカイブの実践を通じて、保管・整理の手法など電子音楽のアーカイブ方法を研究した。記録映像だけでなく、上演に関する背景も読み解くことで再演の可能性についても検討した。電子音楽を再演する際、作品のシステムを現行の環境で動作するようにしなければならないが、そのための基礎資料としてアーカイブが活用される。

14:00～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 1/Acoustic Music Live Concert 1 :

1-1. 足本憲治/Ashimoto Kenji 「となりの住人/The Neighbor」

作品解説/Concept of Work:

星新一のショートショートに『となりの住人』という、深夜のアパートを舞台にしたシュールな作品があります。本作を作曲中にそれをふと読み返すことがあり、この曲の風情になんとなく通じるものがある？とタイトルに拝借しました。最近、音楽を聴いているといつの間にか聴き入ってしまう自分に気づくことが増えました。何やらくたびれているのかもしれませんが(笑)。そういう「自身の音楽の聴き方」といったことが自作品にもやっぱり出るのかなあ、と感じるような、静かな作品となりました。読後感のようなものが味わい深い作品になっていたら嬉しいです。

略歴/Short Biography:

創作活動のほか、映画・TV、コンサートにおける編曲をしばしば担当。中学校の音楽教科書には編曲作品が複数採用されている。全幕の編曲を担当したオペラ《オルフェオとエウリディーチェ》では三菱UFJ信託音楽賞奨励賞を受賞。最近の作品・仕事としては、吹奏楽曲『KickyGame』(WAKO Records)、フルート独奏曲『Bocce』(Daikisound)、NHK連続テレビ小説『おかえりモネ』、TV-CF『いち髪』など。現在、国立音楽大学准教授。東京都港区立青山中学校講師。

1-2. かつふじたまこ/Katsufuji Tamako 「私のおうちを壊さないで/Don't Destroy My Home」

作品解説/Concept of Work:

「ガザ地区に住む老人が、イスラエルの攻撃により瓦礫となった我が家の前に毎日やって来ては、そこに佇んでいた。それは彼が家族と築き上げて来た大切な家だった。」という記事を目にした時、私は怒りと悲しみが混じったどうしようもない気持ち込み上げ、この作品を作りました。ここに描かれているのは私のほんの個人的な家族の記録であり、記憶です。でも壊されてはいけません。世界中で戦争が無くならない今、改めてこの作品を上演したいと思います。

It was in 2008. I read an article that said, "Every day, an elderly man living in the Gaza Strip would come and stand in front of his house, which had been reduced to rubble by Israeli attacks. It was the precious home he had built with his family." When I read the article, I was overcome with a mixture of anger and sadness, and I decided to create this work. What is depicted here is a very personal record and memory of my family. But it must not be destroyed. Now that wars continue to exist all over the world, I would like to perform this work once again.

略歴/Short Biography:

音作家。90年代半ばより詩や言葉を用いた音作品の制作を始める。2000年 INA-GRM(仏)にて電子音響音楽の作曲を、2005年 FUTURA フェス(仏)にてアコースモニウム演奏を学ぶ。何気ない日常から小さな奇跡(音)を拾い集め、紡ぎ出されるその作品は、日常の隣のちょっとへんてこな世界を表現する。作品はフランス他ヨーロッパ各地やニューヨークでのフェスティバル、ラジオ番組でも上演されている。一方、鍵盤ハーモニカやビー玉、ペットボトルなどの日用品で奏でる繊細な生音と、エレクトロニクスが融合された即興演奏でも唯一無二の音世界を表現する。 <http://hello-tsukineco.jimdo.com>
<https://tamakokatsufuji.bandcamp.com>

1-3. 佐藤亜矢子/Sato Ayako 「Journal M」

作品解説/Concept of Work:

2024年8月27日、晴天。リュック・フェラーリが、ラジオフォニック作品《盲人の階段》を作曲するために訪れた、マドリード市内の7箇所を巡った。フェラーリの足跡を辿りながら。しかし、これは私の、私だけの旅。夏休みの絵日記。

・シーケンス1:乗車する電車に迷い、駅員に尋ねる。無事にアトーチャ駅から出発し、El Corte Inglés という商業施設へ向かう。スーパーマーケットでスペイン土産のレトルトパエリアを買った。「袋をいただけますか？」テレフェリコ公園では、騒がしい工場の音を背景に、鳥が不思議な声で鳴いている。

・シーケンス2:ビスティージャ庭園の噴水は涼しげだ。マドリードは暑い。セゴビア通りを通して、パハ広場に到着する。平和な夏の日。Mercado de la Cebada というマーケットには、魚屋や八百屋など多数の商店が並ぶが、比較的早い時間に閉まってしまうらしい。のどかな午後のコンデ・デ・バラハス広場、子供が自転車で遊んでいた。

・シーケンス3:Puerta del Sol、太陽の門。様々な言語が聞こえてくる。各地からの観光客が集まっている。太陽が照りつける。空が青い。そして最後にブラド美術館に辿り着いた頃には、疲れ果ててしまった。巨大な、美術品の展示室であり収蔵庫。いろいろな場所から来た人々が、戯れる場。

略歴/Short Biography:

作曲家、アーティスト。主に電子音響音楽の領域で国内外にて活動。旅先や日常で出会う雑音・生活の音・物音などの録音物を素材とし、環境や場所の記憶を辿りつつ書き上げるような作品を手がける。映像作家や現代美術家との共作や、アコースモニウム演奏、イベントオーガナイズ、展覧会でのサウンドディレクションも行う。ICMC、SMC、NYCEMF、Festival Futura などの国際学会・国際音楽祭で作品上演。東京藝術大学大学院アカンサス音楽賞、Destellos Competition、Prix Presque Rien、UPISketch Competition 他受賞。2019年東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。フランスの作曲家リュック・フェラーリの作品研究で博士(学術)取得。玉川大学、大阪芸術大学、東京電機大学、尚美ミュージックカレッジ専門学校非常勤講師を経て、2025年4月より静岡文化芸術大学デザイン学部デザイン学科講師。

1-4. 宮木朝子/Miyaki Asako 1)「水滴のエチュード/Etude of water drop」 2)「フェニキアの不死鳥/Phoenix in Phoenicia」

作品解説/Concept of Work:

1)水滴と録音時の微かなアンビエントノイズが素材の2分間のエチュード。

2)-先史時代にベルベル人が現在のモロッコに現れた。紀元前814年に現在のレバノンから到来したフェニキア人がカルタゴを建設すると、その後カルタゴのフェニキア人はモロッコ沿岸部にも港湾都市を築いた。-(wikipedia モロッコの歴史より)
2025年9月、まだ暑さの残るモロッコを旅した。この作品は、マラケシュ、フェズ、メルズーガ、カサブランカでフィールドレコ

ーディングをしたサウンドのみで構成されている。砂漠で体験した圧倒的な静寂。遙かな距離を隔てて聴こえてくる遠い音響。寂しいほどに耳の近くで消えてしまう音。スークの喧騒、グナワ音楽の金属打音、モスクの中で輪郭を見失う祈りの声。距離の顛倒した場所の痕跡をとらえた。記憶の中で描き換えられ眩暈の中で聴く旅の備忘録。タイトルは乾いた地への幻想からくる言葉遊びから成る。言葉の中に、[phone][axi(s)← áxon(軸)]が隠されている。

略歴/Short Biography:

東京都立芸術高等学校音楽科ピアノ専攻、桐朋学園大学音楽学部作曲理論学科作曲専攻卒。東京大学大学院超域文化科学専攻表象文化論分野修士課程修了、博士課程単位取得満期退学。尚美学園大学准教授。早稲田大学、桐朋学園大学非常勤講師。現代音楽協会作曲新人賞、秋吉台国際作曲賞佳作入選。NHK 技研公開 22.2ch 高臨場感オーディオシステムのための音楽制作、コニカミノルタ・プラネタリア東京での 22.2ch 作品展示など空間音響による芸術表現を中心に活動。5.1ch サラウンド作品で「坂本龍一|設置音楽展コンテスト」最優秀賞、没入型フルドーム映像(映像・馬場ふさこ)とサラウンド音楽の作品で第 9 回国際科学映像祭最優秀賞、International fulldome festival Best Art Show Prize 受賞、ICMC2016、NYCEMF2019 入選。近作に Auro 3D/ヴァーチャル・サラウンドによる《Opera acousma》(RAF2022 委嘱)、小阪淳のビジュアル展示《Asphaltism》(2025)の音楽、千田泰広のライトアート展示《Momentary scapes》の音楽(種子島宇宙芸術祭 2025)がある。

1-5. 渡辺愛/Watanabe Ai 「和歌/Waka」

作品解説/Concept of Work:

今から 66 年前に作曲家・外山道子は「Waka」というテープ作品をアメリカでリリースした。数年前から彼女の特異な経歴に惹かれている私は、彼女が作曲に用いた和歌をイメージソースに作曲してみることにした。「我がやどのいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも一大家持」等々の歌をなぜ道子は選んだのかわからない。わからないなりに編んでみたのが本作だ。笙の音はカニササレアヤコさんによるが、彼女の音は五七五七七より多くのことを語っているような気がした。フィールドレコーディングの素材はすべて昨秋に訪れた直島と女木島の音風景である。英語のナレーションは井上莉那さん。なお、後半5分を抜き出したショート・バージョンを「和歌一習作」として来月東京芸術劇場で初演予定。

略歴/Short Biography:

作曲・アコースモニウム演奏・即興活動を行う。東京音楽大学大学院修了後に渡仏、パリ国立地方音楽院を経て東京藝術大学大学院修了。リュック・フェラーリ研究で博士号取得。現在、昭和音楽大学、東京藝術大学、武蔵野美術大学、玉川大学非常勤講師。日本電子音楽協会理事。美学校講師。 JAPAN2011 受賞(イタリア)・ICMC2018 入選(韓国)・プレスク・リヤン賞選出(フランス)、France Musique(フランス)・現代の音楽 (NHK)・RADIO SAKAMOTO(J-WAVE)での放送など、国内外で評価を得る。

15:00~ K101 ホール

公募入選作品コンサート A/Concert A Works Selected by CCMC :

A-1. ドミニク・ラバテル/Dominique Rabatel 「BABELOUED」 演奏/Interpreter: 渡辺愛/Watanabe Ai

作品解説/Concept of Work:

nourri de nombreux voyages, mon travail s'inscrit dans une recherche policulturelle et polisensuelle au dela des frontières Orient Occident

多くの旅に育まれ、私の作品は東洋と西洋の境を超えたところでのポリカルチャー、ポリセンシユアルを追い求めた結果である。

略歴/Short Biography:

CNSM Paris classe GRM 1981 1983 Theatre Improvisation enseignement etc

CNSM パリ GRM クラス 1981 年~1983 年 演劇 即興 指導など

A-2. ジュゼッペ・タッフィ/Giuseppe Taffi 「Elastic Friction」 演奏/Interpreter: 高野大夢/Takano Hiromu

作品解説/Concept of Work:

Elastic Friction originates from a simple yet universal gesture: the act of tearing a piece of adhesive tape. This everyday sound, usually overlooked, becomes the raw material and generative core of the piece. The rough and unpredictable texture of the tear is expanded and transformed, unfolding into a journey that oscillates between noise and rhythm. What lasts only an instant in reality is stretched in time, revealing subtle layers and hidden structures. Stripped of its practical function, the tape turns into pure sonic matter, inviting the listener to rediscover beauty and energy within the smallest human gestures.

略歴/Short Biography:

Giuseppe Taffi was born in 1990 in a small coastal town in Abruzzo, Italy. From an early age, his father introduced him to the guitar and to the playful world of tapes and vinyl. He later studied rock and classical guitar, eventually opening a small studio dedicated to music production and mixing. He founded the band Tafka, releasing the debut album Hikikomori Sun, which led to a European tour. Over time, Giuseppe discovered acousmatic music, a field that deeply inspired him to resume his studies at the Luisa D' Annunzio State Conservatory of Pescara, where he now explores digital filters and the intersection between programming and sound.

A-3. ホワン・カルロス・バスケス/Juan Carlos Vasquez 「The Unheard Remain」 演奏/Interpreter: 大久保雅基/Ohkubo Motoki

作品解説/Concept of Work:

The Unheard Remain is an acousmatic composition that transforms archival recordings of activism and resistance from multiple moments in Latin American history into a spectral landscape of fragmented and distorted sound. The work subjects these testimonials to digital erosion—granular disintegration, spectral crushing, and algorithmic decay—obliterating words yet preserving the emotional resonance of defiance and grief that animates them. The piece enacts both violence and remembrance, evoking how collective memory persists even when history attempts to erase it.

略歴/Short Biography:

Juan Carlos Vasquez (www.jcvasquez.com) is an award-winning composer, video game researcher, and academic. His creations have resonated across continents, being featured in over 30 countries spanning the Americas, Europe, Asia, and Australia. Events and venues featuring Vasquez's works include Ars Electronica (AU), the Ateneum Art Museum (FI), the Seoul Arts Center (KR), the Lincoln Center (USA), and the Berklee College of Music (USA). He earned his M.A. in New Media from Aalto University (FI) and subsequently completed both an M.A. and a Ph.D. in Composition and Computer Technologies from the University of Virginia (US).

A-4. エドワード・デカイセル/Edward Dekeyser 「蒸発/Johatsu」

作品解説/Concept of Work:

Johatsu (蒸発, lit. "evaporation") refers to the people who purposely vanish from their established lives without a trace. Often to escape a situation of stress, shame by society or abuse. Every year, nearly 100,000 Japanese people voluntarily disappear to get rid of their past and start anew.

For some, the act of disappearing is not just a personal choice but a reflection of the intense expectations placed on individuals to conform and succeed.

I have been trying to imagine this evaporation and transition to a new present – with the voice transmitting from the past.

略歴/Short Biography:

Edward Dekeyser studied electroacoustic composition at the Royal Conservatory of Mons and took prior steps in multiphonic composition and diffusion at the sound design atelier of the Royal Academy of Antwerp. Awarded in 2021 first place in 'L' Espace du son: Concours de spatialisation', an international competition from "Influx – Musiques & Recherches" for spatial interpretation of electroacoustic oeuvres on a world-renowned acousmonium of over 80 loudspeakers.

A-5. ハク・インキ/Bai YunQi 「もし僕を見つめたなら/If You Look at Me…」 演奏/Interpreter: 大久保雅基/Ohkubo Motoki

作品解説/Concept of Work:

子どもの頃、劇団で働く祖父のそばで過ごしていた。

祖父が亡くなった後、夢の中で「芝居をなさい」と言われ続けた。

やがて演劇高校に進学し、夢は消えた。

大学に入り、私は問いかけた。

「本当に芝居を愛しているのか、それとも祖父の声に導かれているのか。」

本作品では当時の舞台記録音声を素材としている。

夢と現実の境界が曖昧になるとき、「自然に起こること」は本当に自然なのか——。

かつて私はこう綴った。

「時々、自分の手や足の感覚を失う。

そのたびに、神経の末端を必死に思い描く。

血が心臓から指先へと流れていく様子を想像し、

冷たさを感じた瞬間、手は戻ってくる。

きっと彼は魂の旅に出ているのだろう。

どこかで、私を探して叫んでいるのだろう。」

彷徨う意識と身体の間を音で探っている。

略歴/Short Biography:

ハク インキ。中国出身。幼少期より家族に影響を受け、中国伝統演劇「昆曲」と伝統楽器「古琴」を学ぶ。蘇州市芸術学校を卒業後、中国戯曲学院の昆曲表演専攻を修了。現在は日本・東京で電子音楽を学んでいる。

身体と電子音楽とのあいだに生まれる不思議な反応を探求している。電子音響と中国美学を融合させ、昆曲や古琴の要素を取り入れた創作を行っている。

2021年に他の二人の中国人アーティストと共に『臨川四夢』を制作し、中国の「阿那亜(アナヤ)演劇祭」と「烏鎮演劇祭」で上演された。2023年には英国に招かれ、ロンドンでアーティスト交流公演を行った。

A-6. チン・ファーミン/Qin Faming 「A Voice Intolerable To Heaven And Earth」 演奏/Interpreter: 大久保雅基/Ohkubo Motoki

作品解説/Concept of Work:

This is an electroacoustic music piece about the imbalance and reconstruction of order. It emerges within time and space, drifting between reality and illusion. Sounds continually extend through loops of creation and collapse. In the reassembly of old structures and the birth of new textures, resonance transcends time, becoming an echo that trembles through the cosmos. Composed in four parts, the piece employs the Kyma system for synthesis and reconfiguration of sound, alongside other processors for unique effects. It seeks to convey that all things in the world are not bound by form nor confined by rules, but may return to the currents of time and space—probing origins while opening new possibilities. In this convergence, sound flows into spacetime as both primordial and eternal, embodying a presence that is at once raw, limitless, and enduring.

略歴/Short Biography:

Qin Faming is an electronic music composer and sound designer studying at the Xi'an Conservatory of Music, where he was admitted as the top student in his major. His work explores the relationship between sound, space, and perception, often transforming everyday noises into expressive musical forms. Combining advanced digital techniques with a refined sense of structure, Qin creates immersive soundscapes that balance technology and emotion.

16:00～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 2/Acoustic Music Live Concert 2 :

2-1. 坂野伊和男/Banno Iwao 「osmosis」

作品解説/Concept of Work:

音高や音色の異なるいくつかの音をそれぞれ独立して規則的もしくは不規則的に繰り返して音列を生成した。これは昨年の作品で既に試みているが、引き続き多様な音列を作れないか探ってみた。無作為や出現確率のコントロールによる音列とも絡めて、音が揺れて戯れているような、そんな感覚が感じられたら、などと考えながら音の流れを構成した。

略歴/Short Biography:

1959年 愛知県生まれ。九州芸術工科大学 芸術工学部 音響設計学科 卒業。同大学院 修了。1986年 NHK 日本放送協会入局。主にドラマ、音楽のミキシングに30数年間従事。ボンクリ「電子音楽の部屋」2023 出展, Festival Futura 2024 出展。CCMCには公募も含め2012年から参加している。

2-2. 花澤昂/Hanazawa Subaru 「Raydistorter」

作品解説/Concept of Work:

あるSF作品に登場する、光で意思疎通を行う存在から発想を得ています。Raydistorterは、作中で「言語の隔たりを消す」装置を介して人間と交信します。光の周波数帯は可聴域の外にあり、私たちが思い描く「言語」とは、伝達手段としての構造は共有しつつも、知覚される質が異なります。人間は口を通して音を発し、意思を伝達します。では、光の周波数から発せられる「言語」は、どのような音として立ち現れるのでしょうか。本作では、その非可聴の「言語」が音として現れたときに残る痕跡、変換の跡や断片を私なりのイメージで表現しました。聴き手は断続的な手がかりを辿るだけで、明確な答えは与えられません。アコースモニウムにおける音響効果の抽象性を第一に考えた曲です。一部、音飛びのように聴こえる音やノイズが収録されていますが、作者の意図通りの表現であり、ミスではありません。

略歴/Short Biography:

尚美学園大学芸術情報学部音楽応用学科卒業。在学中、宮木朝子氏のもとで楽曲制作およびアコースモニウム演奏を学ぶ。現在、フリーランスとして主に電子音楽制作からミックスダウン、MA、効果音制作等の分野で活動中。CCMC2022FUTURA 賞受賞。

2-3. 高橋哲男/Takahashi Tetsuo 「フィールド・レコーディングと境界/Fieldrecording and boundaries」

作品解説/Concept of Work:

Field recording by Geophone and the live recording of improvised modular synthesiser play. They are each acrossing their boundaries. Finally they are an one which is not them in chaos.

ジオフォンによるフィールドレコーディングとモジュラーシンセの即興演奏のライブ録音。各々が境界を横断し、最後には一つとなる。

略歴/Short Biography:

テクノロジーや空間、身体表現などに注目し、コンピュータープログラミング、モジュラーシンセや様々な楽器を演奏しアンビエント 即興 実験音楽 ノイズなど多くの音楽プロジェクトに参加している。CCMC2019より毎年参加(中止除く)、2024年より地元仙台でAobaneなどのアコースマティック コンサート参加。Jai Machine(<http://shrine.jp>,涼音堂茶舗,Beta Budega),Corps sans Organe、長尺曲、実験音楽のネットレーベル Nord Perdu Edition 主宰

2-4. 田中 敬一/Tanaka Keiichi 「視覚の緊張/Tension of Vision」

作品解説/Concept of Work:

自身の写真作品をイメージから着想したアコースモニウムのための楽曲。光の対比や密度と距離感などを音で表現したく、自作アナログシンセにおける有機的なサウンドを軸に取り組みました。“Tension of Vision” is an Acousmonium piece inspired by my photographic work, “The Sun and the Earth.” In this work, I translate the contrast of light and the sense of density and distance into a spatial sound experience. The composition is driven by the visceral output of a self-built

analog synthesizer, emulating the raw energy of noise guitars and the gravity of deep strings. This is layered with the Prophet-10's pads, which I have infused with noise to achieve a matte, non-reflective texture.

略歴/Short Biography:

多摩美術大学デザイン科(グラフィック、写真、秋山邦晴現代音楽論) 写真と音楽のインスタレーション
FITA2001, SIAF2014, JSPA2020, CCMC2023(MOTUS)などにて入賞歴あり Keiichi Tanaka-Tama Art University,
Department of Design (Graphics, Photography, Kuniharu Akiyama Contemporary Music Theory) Photography and Music
Installation. Award-winning at FITA 2001, SIAF 2014, JSPA 2020, CCMC 2023(MOTUS)...

2-5. 長瀬元應/Nagase Gen 「Fragments 2023-25」

作品解説/Concept of Work:

素材や作り方からして、2023年から25年にかけての「断章」と同シリーズと思って貰って構わない。ある意味旧作の変奏・変容とも思われそう。別作品を予定していたがデータ不具合で制作中止した。収入を医療費に費やさざるを得ない現状では設備やソフトウェアに投資できない、その無念を告白しておく。普段ぼくを取り巻く、音楽や芸術とはまるで違う環境・現実から、早く抜け出たい。演奏時間およそ8分40秒。

略歴/Short Biography:

1963年東京生まれ。学習院大学仏文学科在学時に個人レッスンで作曲を有馬禮子氏、音楽史・音楽学を西原稔氏に師事。音楽・芸術関係の編集記者に従事したのち2003年CCMC夏期アトリエ参加。2010年以降「長瀬元應/Gen0Nagase」名義で電子音楽作品を発表。CCMCコンサート、11、12、14年富士電子音響芸術音楽祭(FAF)、15年FAF ANNEX FUJINOMIYAに出展。甲状腺疾患で活動休止していたがCCMC2022から復帰。

2-6. 守谷悠吾/Moriya Yugo 「透明なものの限界/The limits of transparency」

作品解説/Concept of Work:

透明さの一つの秩序を持って全ての容器に収められている。この容器に水を注ぎ切ったとき、透明さは光となって全ての空間に帰ってゆく。

略歴/Short Biography:

2002年生まれ、神奈川県出身。電子音響音楽の作曲やハウリングの原理を利用し竹を素材にして製作したFeedback Organという自作楽器を使用し、ライブパフォーマンスを行う。2024年『落ちてゆく』がContemporary Computer Music Concert 2024 Motus 賞を受賞、Festival FUTURA2024(フランス)にて上演。

17:15~ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 3/Acoustic Music Live Concert 3 :

3-1. 渡邊裕美/Watanabe Hiromi 「アクア/Aqua」

作品解説/Concept of Work:

水は、私たちに最も身近で、地表を大きく占める存在です。固体・液体・気体というそれぞれの形態に応じて、固有の響きと音の風景をもっています。澄んだ水の流れの中へ身を沈めると、日常の聴覚では捉えきれない、驚くほど繊細で多層的な音の世界が広がっていることに気づきます。《aqua》では、水そのものが秘める音響の表情に耳を澄まし、流れや密度の変化が立ち上げる「水の音景色」をたどります。水中録音には H2a-XLR ハイドロフォンを用い、身近でありながら未知の音としての水に、あらためて向き合いました。本作は2011年、パンタン音楽院オデトリウムにて初演されました。

略歴/Short Biography:

静岡県生まれ。東京藝術大学大学院音楽学専攻修士課程修了後、渡仏。パンタン音楽院にて電子音響音楽のDEMを審査員満場一致の最優秀で取得し、同時にフランス著作権管理団体 SACEM より奨学金が授与される。ジャン・モネ大学サン=テティエンヌ校にてコンピュータ音楽専門職修士課程修了。繊細な色彩の移ろいが生み出す仮想の音響空間を追求し、創作活動を行う。近年は幾何学曲線による音の空間投影の制御や、音楽・映像・身体表現の連関にも関心を寄せる。主な受

賞歴に Musica Nova 2017 ミクスト音楽部門第 1 位、CCMC 2011 ACSM116 賞。ほかに INA-GRM 主催 Banc d'essai 2013、NYCEMF 2016、ICMC 2016 などでも作品が入選。現在、名古屋市立大学非常勤講師。hiromiwatanabe.com

3-2. 森田信一/Morita Shinichi 「Trio 1」

作品解説/Concept of Work:

作品が進行する中に、異なった素材による3つの流れを合わせて作品を構成することを考えた。そこで、3人の演奏家が参加する演奏形態をイメージして、タイトルをトリオとした。メインの流れのほかに、重低音の流れと、数列的なリズムの流れ、これら3つを全体の流れとしてまとめることができていくかどうか。そこを評価していただきたい。次作で更にトリオのアイデアを進めていきたいと考えている。

略歴/Short Biography:

東京理科大学で理論物理学を学ぶ。江崎健次郎主宰の音響デザイナー協会に加わったことから、“音展”(音の展覧会)での活動で、1973年から1979年まで電子音響作品を発表。東京学芸大学大学院で作曲と音楽教育学を学ぶ。作曲グループ“パッケージ21”(1984~1990)その他で器楽・声楽作品を発表。電子音響音楽は、CCMC、Miso Music Portugal、FAF、Bourges で発表。作曲家協議会会員。

3-3. 田代啓希/Tashiro Hiroki 「月のとぼり/Shroud of the Moon」

作品解説/Concept of Work:

科学技術が発達した現代においても、月には依然として未知の部分が多く、我々にとって身近な存在でありながら、どこか遠い存在でもある。時にはフィクションの舞台として描かれ、また人類の進歩の歴史に刻まれる重要な象徴として語られてきた。その姿はさまざまでありながらも、人々を魅了し続けている。

本作は、朔日に姿を消す月を「帳」に見立て、そこから着想を得て制作された電子音響音楽作品である。

朔の頃、月はあたかも大きな帳に覆われたかのように姿を消す。その内側は、我々の目では観測できない未知の空間である。本作における帳は、多種多様な音が重なり合って紡がれ、ときおりその響きが帳の外へとこぼれ落ちる。帳の内側では一体どのようなことが行われているのだろうか。その気配は夢と希望と現実のあいだで揺れ動き、我々の想像力をかき立てるだろう。帳の外まで聴えてくるさまざまな音から、聴き手それぞれがその情景を自由に想起していただければ幸いである。

略歴/Short Biography:

1995年神戸市生まれ。電子音楽家、音響・映像技術者など活動は多岐にわたる。

創作者としては、電子音響音楽の作曲・演奏を主な活動フィールドとして、作品制作に取り組む。技術者としては、音響・映像を双方の知識と技術を活かして音響関連のみならず、コンサート撮影などにも従事。両分野のテクニカルサポートも行っている。これまでに、CCMC(2016~2025 東京/京都)、FESTIVAL FUTURA (2019,2020,2024,2025 仏)、ボンクリ・フェス(2019~2023 東京)などで作品を上演。CCMC2019にてFUTURA賞、2020にてMOTUS賞を受賞。大阪芸術大学大学院博士課程前期芸術研究科芸術制作専攻作曲研究領域(電子音楽)修了。現在、京都精華大学メディア表現学部非常勤講師。

3-4. 牛山泰良/Ushiyama Taira 「ふおん/FUON」

作品解説/Concept of Work:

誣、ありもしない事。不、否定する。訃、死の知らせ。音、怨、隠。どこか暗くて恐ろしい言葉の響き。そのような雰囲気がいささか心地良いと感じてしまった。こんな気分を皆様に感じて欲しくて、共感して欲しくて、でもまあ無理だろうなと思いつつこの作品を上演してみます。

略歴/Short Biography:

1989年12月長野県諏訪市に生まれる。電子音楽、サウンドアート作家、音響エンジニアと活動は多岐にわたる。大阪芸術大学大学院博士課程後期課程在籍。エリザベト音楽大学、京都精華大学非常勤講師。2014年に仲間と共に電子音楽カンパニー「hirvi」を立ち上げ、電子音楽のワークショップやコンサートを企画・運営している。創作においては伝統と前衛、音と空間を内包した創作を目指す。2020年音響技師として参加した「ぎふ未来音楽展 2020 三輪真弘祭 一清められた夜」が佐治敬三賞を受賞。2021年音響技師として参加したオペラ「ロミオがジュリエット」が佐治敬三賞、文化庁芸術祭音楽部門大賞を受賞。2025年フランスで開催された電子音響音楽の祭典「Festival FUTURA 2025」、国際学会「Electroacoustic Music Studies Network 2025」で自作が上演。

3-5. 高野大夢/Takano Hiromu 「Circulatory Field」

作品解説/Concept of Work:

午前1時、自宅近隣の飲食店の業務用換気扇がこれでもかという轟音を夜の静けさに刻みつけている。一聴するとただの騒音だが、注意深く耳を傾けるとそれは不規則で、時々音楽的な変化を感じなくもない。日常的にそのような音に接する中で、私が「空気を循環させる物体」の音を創作の題材として扱うことに思い至ったのは偶然ではない。私は自宅で使用しているサーキュレーターにマイクを立ててみることから始め、それまで気がつかなかった、この機械が発する多様なサウンドを収録した。それらを素材として用いて構成したのが本作である。当初、クールな作品を書きたいと考えていたものの、結果としては音色への欲求が優ったようだ。しかし、空気が循環する場においては往々にして予期しないことが起こる。この作品もまた、回転する物体に誘われ、不規則と偶然の道筋を辿ったようである。

略歴/Short Biography:

山梨県出身。山梨大学大学院教育学研究科修士課程修了。東京電機大学大学院先端科学技術研究科博士課程在籍。作品は Contemporary Computer Music Concert (CCMC)、International Computer Music Conference (ICMC)、Seoul International Computer Music Festival (SICMF)、Espacios Sonoros など、国内外のコンサートや音楽祭にて上演されている。音響エンジニア、アコースモニウムの演奏者としても活動し多くの作曲家の作品上演に携わる。日本音楽表現学会会員、日本電子音楽協会会員、音と音楽・創作工房 116 運営委員。

3-6. ヴァンサン・ロブフ/Vincent Laubeuf 「Devenir-eau (2016)」 演奏/Interpreter: 高野大夢/Takano Hiromu

作品解説/Concept of Work:

この作品は、人間を自然の一部として捉えることを促します。滝の流れに着想を得たこの作品は、音を生命力として循環させます。聴くことは、その音に身を委ね、溶け込み、やがて自らも水となることです。

略歴/Short Biography:

器楽作品、電子音響音楽作品の作曲家、インスタレーション・デザイナー、そして即興演奏家であり、芸術監督として音にまつわる幅広い活動に携わっている。それらの経験からの異なる「視点」からアイデアを探求している。Ina-GRM、Muse en Circuit のスタジオに招聘され、l'Instant donné、Court-Circuit または L'ONCEIM などのアンサンブルのために作曲している。フランスと海外(北京、東京、ニューヨーク、ジュネーブ、ウィーン)で演奏された作品は 100 を超える。電子音響音楽のミュージシャンとして、いくつかの日本ツアーに参加。また、秋の音楽祭-festival d' Automne(バステューユオペラ劇場、サン・ドニの TGPCDN)では、L'Instant donné と Motus と共に、カールハインツ・シュトックハウゼンの「Kontakte」の電子音響パートを演奏した。2008 年には la Muse en Circuit 主催の第 8 回リュック・フェラーリ国際コンクールに入賞。CD のリリースは、2011 年に Motus から『Raréactions』、2013 年に Obs*(ロシア)と Oto(日本)から『The Poetics of Vacuum』、2019 年に Artsonique & Motus から『...on ne sait pas』がある。2007 年からは la compagnie musicale Motus(パリ)と festival Futura(クレ、ドローム県)の芸術監督を、2021 年からはヴィルールバヌの国立音楽学校で電子音響音楽の作曲の教授を務めている。

18:30~ K113

ディスカッション/Discussion 司会/Moderator: 柴山拓郎/Shibayama Takuro

「アコースマティック音楽の創作と、その多様な未来」

19:10~ K110

懇親会/Social Gathering

2月22日（日）

10:00～ K123

ワークショップとデモンストレーション「アコースモニウム演奏法」/ Workshop & Demonstration
「Interpretation of Acousmonium」： 檜垣智也 /Higaki Tomonari

12:00～ K113

レクチャー 2/Lecture2 講演者/Speakers :

L2-1. 大久保雅基/Ohkubo Motoki 「AI を用いたサウンド・インストールにおけるエージェンシーとテクノ・アニミズム」

概要/Summary:

現代の AI サウンド・インストールにおいて、私たちはなぜ機械の音に「他者の意志」を感じるのか。本レクチャーでは、ブラックボックス化した AI の非人間的な論理が生む「テクノ・アニミズム」の概念を、認知科学や音響美学の視点から紐解く。生成モデルによる解釈、過去の継承、そして物理的な振る舞いが織りなすエージェンシーを分析し、人間と AI が共存する場としての美術館の新たな可能性を提示する。

L2-2. 岡田智則/Okada Tomonori 「「菜の花をたどって」活動報告」

概要/Summary:

2026年2月14日に自主企画で開催した電子音楽コンサート、「菜の花をたどって」の活動報告。ライヒの「エレクトリック・カウンター・ポイント」やブルーゼの「アンセム 2」の演奏準備や本番まで。世界初演作品「菜の花」の制作課程について報告する。

L2-3. 林恭平/Hayash Kyohei 「電子音響音楽と偶然性の問題(序章)」

概要/Summary:

九鬼周造の『偶然性の問題』を基とした電子音響音楽と偶然性について考察する。芸術、中でも音楽、更には電子音響音楽はその制作過程の段階から偶然性に満ち溢れている。偶然性を捉えようとする試みはまた音楽的な戯れでもある。今回、私が語る事はその事の入り口、序章である。であるから至らぬ点は多々あると思う。ここから更に考察を巡らし強固な哲学を樹立する予定である。

L2-4. 檜垣智也/Higaki Tomonari 「アコースモニウム演奏のストラテジー～ドニ・デュフル「Liebestod」を題材に」

概要/Summary:

登壇者がこの後のコンサート(15:15～「アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 5」)で演奏するドニ・デュフル《Liebestod》を取り上げ、アコースモニウム演奏者の観点から具体的な演奏戦略について解説します

14:00～ K101 ホール

アコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 4/Acoustic Music Live Concert 4 :

4-1. 由雄正恒/Yoshio Masatsune 「無一物中無尽蔵/Inexhaustible in nothingness」

作品解説/Concept of Work:

この曲は、「間」をテーマとした一連の作品の中の一つとして、電子音響作品として作曲されたものである。6 作目。兎角世の中というのは蠢めいていて休む暇なし。

—中略—

音楽では音が鳴らない箇所は休符、休符は休むものではない、ということ禅問答のようなことがある。

—中略—

この禅問答のような捉え方はいかにも日本美学のように思う。

—中略—

間、

この言葉というのはとても感慨深いものである。

—中略—

妄想や執着からの解放は無尽蔵になり得るのか

…

何もない境地に尽きることのないモノが存在しうるのか

… 結びは、
まだ無し。

略歴/Short Biography:

神戸出身。作曲家、メディアマスターNo.75。コンピュータによる芸術作品の創作を専門とし、アルゴリズムック・コンポジション、音響合成、ライブエレクトロニクス、メディア表現を題材にした創作研究を行っている。電子音響作品は、国内外(ICMC-国際コンピュータ音楽会議、Contemporary Computer Music Concert, FUJI acousmatic music festival, MUSICACOUSTICA-BEIJIN, Festival FUTURA 等)において演奏される。昭和音楽大学作曲学科、IAMAS アートアンドメディア・ラボ科を卒業。日本作曲家協議会、日本音楽即興学会、情報処理学会音楽情報科学研究会会員、先端芸術音楽創作学会運営委員、日本電子音楽協会理事、昭和音楽大学准教授。

4-2. 岡田智則/Okada Tomonori 「リュウグウノツカイ/Oarfish」

作品解説/Concept of Work/Concept of Work:

世界各地の深海に生息するリュウグウノツカイは、日本では不吉な前兆と結びつけられることが多く、近年日本各地の海岸に打ち上げられていることが地震との関連でも注目されている。私は、とりわけ海洋汚染という地球規模の環境問題について考えた。大阪ではポイ捨てなどによる都市ごみが河川に流入し、ヘドロ化した水が大阪湾へ達して、海水浴が難しいほど環境が悪化している。この影響は太平洋にも及び、将来日本で魚が食べられなくなる可能性も指摘されている。リュウグウノツカイの死は、人類への警鐘なのかもしれない。また大阪ではお祭りやスポーツイベントの後に多量のごみが捨てられ、自然に暮らす生き物は「住処を壊さないでほしい」と訴えているようにも思える。さらに南海トラフ地震など大災害の予測もあり、それは汚染された地球を自然がリセットしようとする現れなのではないかと感じている。

略歴/Short Biography:

現代音楽作曲家。アコースモニウム奏者。愛知県立芸術大学博士前期課程修了。平成29年度・30年度と愛知県立芸術大学優秀学生賞受賞。長久手市長賞受賞。エレクトロニクスを用いた地域活性化事業や電子技術を使用した現代音楽の普及活動を行っている。「CCMC2017」Futura 賞入賞。「Prix Presque Rien2017」入選。「FESTIVAL FUTURA」をはじめ、国内外の音楽祭にて作品上演多数。2019年「愛知県立芸術大学ポピュラー・クラシック・コンサート」にて、2管編成のオーケストラ作品『ヤマタノオロチ』が世界初演。アコースモニウムや電子技術を使用した音楽における演奏メソッドの研究にも取り組み、「第125回日本音楽学会中部支部 定例研究会」や「先端芸術音楽創作学会」で報告している。現在愛知県立芸術大学博士後期課程在学中。

4-3. 大塚勇樹/Ohtsuka Yuki 「Fragmentary Passage (sluggishness)」

作品解説/Concept of Work/Concept of Work:

いまや自身の心身の断絶を補完するためのセルフ・メディケーション的な作品群となつ(てしまつ)た「Fragmentary Passage」シリーズの現時点における最新作。

「sluggishness」とは脱力感や停滞感、虚無感、不活発などを意味するが、実際に心身の断絶はもはやここにきて音楽を作るだけでは繋ぎ止めるのが困難な状況に陥り、緩やかな破滅、緩慢なる終末へと向かっている。ひび割れた長大なドローンサウンドにまみれたこの作品は、そういった限界的な状況をトレースしているといえるのかもしれない。

略歴/Short Biography:

1986年生まれ。京都府出身。

大阪芸術大学にて電子音響音楽の作曲および多層化立体音響システム「アコースモニウム」演奏を学び、同大学院博士(前期)課程を修了。2012年にフランスで開催されたアコースモニウムの演奏講習会を受講。CCMC 2011では佳作入選、同2012ではMOTUS賞を受賞。

現在ではアコースモニウムの演奏やRoute09名義でのクラブイベントへの出演経験を活かしつつ、モジュラーシンセサイザー、ノイズマシン、リズムマシン、フィールドレコーディングなどの音を素材に、それらを持続的な音色として標本化したものを多数レイヤーすることによって生じる複雑な協和/不協和や位相変化、空間密度といった響きをコントロールすることで、聴覚体験

のみで視覚的なイメージや記憶を喚起させるような作品制作とライブを行う。それらの活動は、音楽評論家の阿木譲に「アカデミックな現代音楽と尖端的なクラブミュージックの狭間に立つ者」と評される。

2014年よりMolecule Plane名義での活動をスタート。『Acousticophilia』(2016)、『SCHEMATIC』(2017)、『Apocrypha』(2022)と3枚のソロアルバムを発表し、BandcampではEP『Fragmentary Passage』シリーズやライブレコーディングアルバム『Extra-Ordinary』シリーズなどを配信している。また、『a sign 2』(2020)、『MEDIUM AMBIENT COLLECTION 2022』(2022)をはじめとしたコンピレーションアルバムへの参加や、リミックス、サウンドプロデュースなど、リリースは多岐に渡っている。

これまでに瀬戸内国際芸術祭、奈良・町家の芸術祭はならあと、KYOTO EXPERIMENT、KYOTOGRAPHIE、大阪関西国際芸術祭、ポンクリ・フェス、Festival of Modularなど多数の芸術祭や音楽祭に出演し、FUTURA(仏)、SILENCE(伊)といったヨーロッパの電子音響音楽のフェスティバルでも作品がたびたび上演されている。

自身の作品制作のみならず、福間創(ex. P-MODEL)、テンテンコ(ex. BiS)、檜垣智也、Merzbow、人間石鹸、nehanなどのマスタリングを手掛けるほか、レコーディングやミキシング、アコースモニウムやインスタレーションの音響技術、企業や映像作品への楽曲・効果音提供、機材コンサルティングなど幅広く事業を展開している。

https://linktr.ee/push_it_studio

4-4. 山口真希子/Yamaguchi Makiko 「子供と-1歳3ヶ月/ avec mon enfant - 1an et 3mois」

作品解説/Concept of Work:

子供と過ごす日常は以前のそれとはまったく変わってしまい、頭に占めるほとんどは子供の事になった。そんな中で作曲しようとする、子供を無視することはできないこと事に気づいた。出産後、初めてのエレクトロの作品だが、生活や今の感覚の記録としての曲を作ってみようと思い、娘の声を録音し、身の回りにある楽器だけで曲を作った。

略歴/Short Biography:

大阪府出身の作曲編曲家でピアニスト。大阪音楽大学ピアノ科を卒業後渡仏。フランス、パリ国立高等音楽院の作曲書法科、ブローニュ音楽院の作曲科、ラヴェル音楽院の伴奏科などで学び、いずれも優秀な成績で修了。その後、パンタン音楽院でエレクトロアコースティック音楽を Jonathan Prager と Marco Marini の元で学ぶ。帰国後、器楽音楽とエレクトロアコースティック音楽をミックスした独自のコンサートを企画し、好評を博している。現在、大阪音楽大学、同志社女子大学でソルフェージュのクラスなどの教鞭を取っている。

4-5. 上野航/Ueno Wataru 「冷たい入江の足音/Footsteps in the cold cove」

作品解説/Concept of Work:

演奏や撮影の用事を頼まれたときに、ついでにレコーダーを持ち込んで何か面白い音が録れないか試してみることがある。この作品では大分佐伯市の入江と神戸の神社で録れた音を中心に、追加で身近な場所の響きや色々な素材を組み合わせることで作品を制作した。入江では舟から 50kg の餅をまく場面、神社では雅楽の演奏の場面が使われている。餅まきの音を録音して自作品に使用するのは二度目だけれども、大抵楽しげな音が録れるので聴き返す度に癒されている。まかれた餅はお土産として大量にいただいたので、まだ冷蔵庫に在庫がある。

略歴/Short Biography:

大阪芸術大学 音楽学科卒 同志社女子大学 非常勤講師 活動:尺八演奏、電子音響音楽の制作など

4-6. 大久保雅基/Ohkubo Motoki 「アームチェア・レイブ/Armchair Rave」

作品解説/Concept of Work:

本作は IDM (Intelligent Dance Music) の音響的語彙を、アコースマティック音楽の文脈で再定義する試みである。通常、ダンスミュージックは身体的な踊りを喚起するが、IDM は変則的なビートやグリッチノイズにより、より知的な聴取体験を志向する。本作では、通常ステレオで完結するこのジャンルを、アコースモニウムという多次元的な再生装置へと拡張した。グラニューラー・シンセシスや FFT 等のスペクトル処理を用い、シーケンスのグリッドによる周期性を保持しつつ、微細な編集によってその質感を金属的・粒状的に変容させている。規則的なビートが空間的な音響テクスチャへと昇華されるプロセスを通じ、ダンスミュージックの身体性とアコースマティックな抽象性が交錯する、新たな聴取領域の創出を目指した。

略歴/Short Biography:

宮城県仙台市を拠点に、コンピュータ音楽とメディアアートの境界領域で活動を展開。テクノロジーが音楽の表現に変容をもたらすプロセスを、制作・演奏・文化の三層から再定義し、バーチャルな音響空間と物理的現実の融合を試みている。その活動は ICMC、ISEA、TENOR、CMMR、ADADA、Sound in Museum 等の国際会議や、MUSLAB、SONIC MATTER、Musica Viva 等のフェスティバルで高く評価されている。Contemporary Computer Music Concert 2010 にて ACSM116 賞、Wired Creative Hack Award 2019 にて Sony 特別賞を受賞。地元仙台では、弦楽四重奏による現代音楽コンサート「絶頂」や、アコースモニウム・ワークショップ、コンサートを実施する「AOBANE」を企画。洗足学園音楽大学を卒業後、情報科学芸術大学院大学[IAMAS]メディア表現研究科修士課程修了。現在は愛知淑徳大学、相愛大学にて後進の指導にあたる。

15:15～ K101

ホールアコースマティック・ミュージック・ライブコンサート 5/Acoustic Music Live Concert 5 :

5-1. 岡本久/Okamoto Hisashi 「私が聴いたものたち 7/The ones I listened to - 7」

作品解説/Concept of Work:

今年もいろいろな音を聞きました。はじめて聞く音もあれば、いつものあの音をまた聞くことができたという喜びも。季節の移ろいがこれまでと違い、虫の声も季節外れに聞くことも珍しくなってきました。音だけでなく多くのものを見、体験もしました。歳を取ってなにかとしんどくて、あまりいいことはありませんが、今まで知らなかったことを知ることができたということだけは、この歳まで生きてきたからこそなんだと感じています。そして、日々の小さな発見や感動を振り返りながら音楽を作っています。

略歴/Short Biography:

大阪芸術大学芸術学部音楽学科作曲専攻卒業。作曲を原嘉壽子氏、七ツ矢博資氏に師事。和声法、対位法をサルバトーレ・ニコローシ氏に師事。作曲や編曲、コンピュータ音楽をはじめオリジナル電子楽器製作、若手の育成など様々な活動を行っている。また音環境研究として、特に様々な里地里山地域の音の記録を行い、その特徴などの分析研究を行っている。関西国際大学教授、大阪芸術大学非常勤講師。音と音楽・創作工房 116(ACSM116)運営委員、神戸市音楽家協会会員等。

5-2. 林 恭平/Hayashi Kyohei 「放蝶園/Butterfly Garden」

作品解説/Concept of Work:

蝶は、理屈無く、その存在自体が美しい。理屈無く蝶は美しい。それは音楽そのものです。その蝶の様な音楽作品を私は作曲しました。この作品は純粋な電子音響音楽作品であり、堅固な構造から成り立っています。

この作品は次に示す時間配分により4つの楽章に分けられています。

第1楽章(00分00秒～02分45秒)、第2楽章(02分45秒～04分14秒)、第3楽章(04分14秒～06分03秒)、第4楽章(06分03秒～10分00秒)。

3楽章と4楽章は途絶えることなく音が鳴らされます。主題となる具体音による短いパッセージが変奏されてそれぞれの楽章を構築しています。第4楽章では其々の主題が高次元で鳴らされ伽藍を構築しこの音楽による物語を終演させます。また、第4楽章最後の到達点で鳴らされる鐘の音とその直前のバイクのエンジン音は雅楽で用いる楽器である笙の和音の並びで鳴らされ日本的な音の響きを演出しています。

略歴/Short Biography:

大阪芸術大学大学院修士課程修了。作曲のみならず電子音響音楽を伴う映像作品の創作を行う。2013年、国立国際美術館にて電子音響音楽コンサート、『Japan Electroacoustic Music Concert』を企画し成功に導く。1979年より続く伝統ある電子音楽コンクール Prix Russolo にて2015年に最優秀賞と第1位を同時受賞。日本代表の陪審員として2016年より任命され、更に2023年より取締役員のメンバーに選出される。2019年、若尾裕が主催する『Creative Music Festival』の講師を務めた。2020年、BBC RADIOの番組『New Music Show』にて作品が放送される。第51回 RADIO SAKAMOTO オーディションに次作が入選し、坂本龍一より「とても丁寧に構成されたミュージック・コンクレート作品」と評される。(敬称略)

5-3. ジョルダ・ダヴィド/Jorda David 「初めてのエレクトロアコースティック散歩/Première promenade électroacoustique」

作品解説/Concept of Work:

この曲で私の娘にエレクトロアコースティック音楽を紹介したいと思い作曲した。日常の会話、周りの音や不思議な音源がどうやって音楽になるかを聴かせたいと思った。いつか娘がエレクトロアコースティック音楽に興味を持ってくれることを願っている。

略歴/Short Biography:

1987年フランス、ペルピニャン生まれ。ペルピニャン音楽院にてピアノを学ぶと同時に、エレクトロアコースティックミュージックを作曲家 Denis DUFOUR と Jonathan PRAGER のクラスで学ぶ。パリ国立高等音楽院にて、2016年エクリチュール科、2019年映像音楽科を修了。パリのアニメーションスクール(Atelier de Sèvres)とコラボレーションし、ショートフィルムのための曲を提供した。また、フランスの様々なオーケストラのために編曲を行う。2022年9月から日本で作曲家、編曲家として活動し、相愛大学で和声法とソルフェージュの非常勤講師として教鞭を取っている。2022年と2023年のCCMCでは、それぞれ「Sonatine Aquarelles」と「交差点」を作曲、演奏した。

5-4. 成田和子/Narita Kazuko 「クジラの哀歌/Élégie de baleines」

作品解説/Concept of Work:

2025年に作曲した「クジラの歌/Chant de baleines」の続編である。フランス国立海洋開発研究所 (Ifremer) の海洋研究者 Hervé Glotin が録音した海洋のさまざまな音を素材としている。海洋汚染や気候変動、海洋交通の増加による被害を訴えるクジラの哀歌である。2部構成となっており、後半ではイルカの鳴き声も用いている。

略歴/Short Biography:

1997年から電子音響音楽コンサートの開催に携わっている。電子音響音楽作品のほか、オペラ、管弦楽曲や室内楽、邦楽作品など多数の作品を作曲、内外で演奏されている。近作にハイブリッドオペラ「テセウス」(京都初演)、マルチメディア作品「DES ABYSSSES AUX ÉTOILES – RÉCITS DES CONFINS」(ツーロン・パリ初演)における DES ABYSSSES の電子音響/器楽パートの作曲がある。同志社女子大学学芸学部音楽学科特任教授。

5-5. 檜垣智也/HIGAKI Tomonari 「「夕立」と「水の上」(『夏八景』より) / “Evening Shower” and “On the Water” (from Summer Eight Scenes)」

作品解説/Concept of Work:

1925年にラジオ放送を開始したNHKでは開局直後からラジオドラマを始めとする純粋な聴覚のための芸術への挑戦が行われており、1930年には擬音(効果音)を主役とした作品「夏八景」が放送されています。こちらの作品は効果音で表現した日本の夏の情景を電波に乗せて家庭へ届けようとする試みですが、そのころのNHKに録音機は存在せず、生放送で行われた「夏八景」はもちろん現存していません。そこで「夏八景」の梗概をもとにして、2人の作曲家が現代的な視点から「夏八景」の再創造を試みました。檜垣智也はAI生成を中心に使用して、そして、清水慶彦はフィールド・レコーディングの手法により広義の電子音楽を作曲しています。2025年版の「夏八景」は放送局を舞台に音響の世界を追究した100年に及ぶメディア・パフォーマンスの歴史を再確認する作品と言えるでしょう。

略歴/Short Biography:

作曲家・アコースモニスト。愛知県立芸術大学大学院修了。博士(芸術工学・九州大学)。作品は欧米・アジア各地で上演され、フランスなどの欧米の公共放送等でも紹介。INA-GRM、Motus、ハーバード大学、ケルン大学、M.a.r.e など世界中のアコースモニウムを演奏。リュック・フェラーリ・コンクール最高賞、文化庁メディア芸術祭審査委員会推薦作品、大阪文化祭奨励賞など受賞。Le Cube、ヴィラ九条山、ACA 財団、Fimincio 財団などで滞在制作。Musiques&Recherches 国際空間演奏コンクール審査員。Futura 国際音楽祭メンバー(演奏・教育担当)、hirvi グループ代表。現在、東海大学准教授、大阪芸術大学大学院客員教授。

5-6. ドニ・デュフル/Denis・Dufour 「Liebestod」 op. 194 (2024) Cycle *Les Acousmalides* 演奏/Interpreter: 檜垣智也 /HIGAKI Tomonari

作品解説/Concept of Work:

トマ・ブランドの協力を得て制作 作曲家のスタジオ(ブランディヴィ)にてコンピューター制作 録音:ドニ・デュフル
チベットホルンと歌:ヘム・イッシュ 声:ラファエル・ウイレンブロック テキスト:トマ・ブランド

2025年10月9日、シャロン・シュル・ソーヌ、グラン・シャロン音楽院講堂にて、ドニ・デュフル企画フェスティバル「Ondes croisées -オンド・クロワゼ」にて、アコースモニウム「アルコム」にて初演

鏡の向こう側へ旅立った語り手が紡ぐ、暗く比喩的な感覚の連なり。ここでのあらゆる再生の試みは、永遠に叶わぬ愛の燃えさかる炎によって、すべて断たれているようだ。[トマ・ブランド]

アコースマティック音楽は、新しい演劇性のある場として登場し、詩がその場を占めるようになった。ドニ・デュフルは、トマ・ブランドのテキストを手に取り、2世紀前にフランツ・シューベルトが友人の詩に対して行ったように、それを音楽的に解釈した。電子音響スタジオにおけるアナログとデジタルの自由なツールと繊細さを駆使し、彼は各テキストを自らのものとし、あらゆる操作と増幅によってその音と意味を練り上げ、ひっくり返し、その真髄を浸透させ、時には純粹な音楽性のためにそれを覆い隠し、また時にはそれを強調し、音楽に組み込んだ。作曲作業を単なる説明として捉えることは決してなく、必要に応じて歌詞を理解する可能性から距離を置き、それを真の素材として扱うことを敢えて試みている。[ジェローム・ナイロン]

略歴/Short Biography:

音の形態学的かつ表現的なアプローチの先駆者の一人であるドニ・デュフルは、器楽音楽とアコースマティック音楽の両分野で、これまでに200作品を作曲している。1976年から2021年まで、パリ、ペルピニャン、リヨンの音楽院、およびブローニュ＝ビヤンクール高等芸術教育センターで教鞭を執る傍ら、研究者、講演者、アドバイザーとしても活躍し、研修、ワークショップ、マスタークラスを開催する。その活動と教育活動を通じて、特にフランス、イタリア、日本でアコースマティック音楽の発展に重要な役割を果たしている。GRM(1977-2000)のメンバーとして、分析ツールの開発、1978年からは電子音楽、1984年からはコンピューター音楽における「リアルタイム」の実践に貢献をした。現代創作にまつわる数多くのイベントの主催者および芸術監督として音楽界に活気を与え続けている。複数の組織、集団、楽器アンサンブルの創設者でもある。2020年より、ブルターニュ地方のランヴォー修道院(モルビアン県)に居住し、文化、遺産、ウェルビーイングのセンター建設に取り組んでいる。彼の器楽、声楽、ミクスト、ライブエレクトロニクス、リアルタイム、アコースマティック作品は、メゾン・オナからCD出版されている。

16:30~ K123

公募入選作品コンサート B/Concert B Works Selected by CCMC :

B-1. マイク・バーナスキー/Mike Vernusky 「極渦/A Polar Vortex」

作品解説/Concept of Work:

A narwhal pierces the stillness. A glacier strains at its edge before surrendering to collapse.

Rather than offering a tranquil portrait of the poles as seen from afar, A Polar Vortex dwells within their turbulence. Glacial fractures dissolve into drifting ice floes; the calls of narwhals splinter into granular choirs. These voices are stretched, folded, and refracted until they coalesce into shifting textures.

A Polar Vortex invites us to listen to Earth's cryosphere as a living, breathing body—where each crack of ice and echo of life is both lament and warning. Here, the narwhal and beluga emerge as messengers and mirrors to our own species, reminding us that even in the planet's most remote depths, there is music waiting to be heard.

略歴/Short Biography:

Mike Vernusky creates music for live performance, radiophonic sound, and audiovisual experiences.

His music is described as “brash” (The New York Times), “isolationist” (The Wire), and “especially otherworldly” (New Music USA).

Mike is an avid field recordist, having recorded calving glaciers in the high arctic, relentless chainsawing in the Amazon to the snake charmers of Marrakech; from the beautiful cacophony that is India to the deadly hippo pools in South Africa.

Vernusky has presented his music and ideas at Shanghai Conservatory, İstanbul Teknik Üniversitesi, Salon Alte Schmiede in Vienna, CMMAS in Mexico, Harvard University, and The University of Huddersfield.

B-2. ルカ・ムッチ/Luca Mucci 「Quando Gli Dei Erano Astri」

作品解説/Concept of Work:

The work is inspired by the ancient myths discussed in Hamlet's Mill by Giorgio de Santillana and Hertha von Dechend. Central to these myths are the complementary symbols of the millstone and the whirlpool, seen as cosmic representations of the constellations and their rotations. The mythical mill, once a divine gift that brought a golden age, sinks into the sea, creating the primordial whirlpool and the flow of time. This imagery informs a sound composition built on a vortex-like motion: from the dark depths where the lost mill grinds eternally, the sound gradually ascends toward ethereal, celestial atmospheres.

略歴/Short Biography:

Luca Mucci is a composer and researcher in the field of acousmatic music and sound art. His work focuses on the relationship between listening, memory, and mythical imagination. His pieces have been presented in international contexts dedicated to electroacoustic music and contemporary sound research.

B-3. シン・ボギョン/Bokyung Shin 「SiLent ≈ LiSten」

作品解説/Concept of Work:

SiLent ≈ LiSten addresses the asymmetry of listening and the gradation of sensory perception through the spatial arrangement of diverse loudspeakers. The speaker system used in this piece consists of units of varying sizes, directions, and textures, distributed throughout the space. The sounds emitted from these speakers may reach some listeners directly, while for others they arrive blurred or transformed—creating a shared environment where each audience member experiences the work differently.

The sound materials in this piece are composed of grammatical elements such as particles, conjunctions, and adverbs—words that normally serve structural or connective functions within sentences. In the absence of content words, these fragments lose their conventional role of conveying meaning and remain as disjointed pieces of language without context. Within this fragmented linguistic field, the audience is invited to construct their own sentences and interpretations. The resulting meanings may hold significance for some, while for others, they may dissolve into nothingness.

略歴/Short Biography:

Bokyung Shin explores new perspectives on the familiar, creating music that traverses the boundaries between sound and non-sound. Using the computer as a contemporary instrument, he develops musical languages that reflect our era and engages in collaborations across dance, video, and installation art. His work focuses on listening as an individual and perceptual act, revealing how each listener's sensory differences shape unique interpretations. Through fragmented sounds and linguistic elements, he exposes the indeterminate nature of meaning and perception, encouraging audiences to construct their own experiences. His works have been presented at ICMC, NYGEMF, Ars Electronica, ACMC, ACT Festival, and DICMF.

B-4. 都築健司/Kenji Tsuzuki 「Dull Weather」

作品解説/Concept of Work:

本作品は、曇天の中、山肌を登っていく滑翔霧(かつしょうぎり)を音楽的に再現しようと試みたものである。水蒸気となり、雲の元となって登っていったものは、やがて雨となって降り注ぎ、その循環を繰り返す。

人間の営みもまた、個が集まり、集団をなし、再び散っていくという同様のサイクルを繰り返す。

このように環境の異なる場においても同じような構造が形成されていくことを、フィールドレコーディングを通して再現し、霧という現象を音を通じて多層的に表現した。

略歴/Short Biography:

2002年東京生まれ、主に電子音響音楽作品を作曲、フィールドレコーディングを通じた音をもとに制作を行なっている。2025年 玉川大学 芸術学部修了。現在、東京電機大学 理工学科研究科(修士課程)に在籍。公益財団法人かけはし芸術文化振興財団 2025年度奨学生。八木澤 桂介、佐藤 亜矢子、柴山 拓郎らに師事。

過去に CCMC(日本)2023 入選、WOCMAT(台湾)2023、WOCMAT(台湾)2024にて Phil Winsor International Youth Computer Music Competition Award 受賞、Micro-coquilles pour Écoutes Périphériques (フランス)2.0, Festival Futura 2025(フランスなどで作品発表。

17:30～ K123

公募入選作品コンサート C/Concert C Works Selected by CCMC

C-1. 矢島豪/Yajima Goh 「風の見えない風景/Invisible scenery of the wind」

作品解説/Concept of Work:

八ヶ岳周辺で録音した、〈石・水・雨・虫・松ぼっくり・どんぐり〉の音を素材音にして、制作しました。

略歴/Short Biography:

1981年生まれ、東京都出身、山梨県在住。ニューエイジミュージック、クラシック、ポップス、電子音響音楽などの作曲を行っている。現在、有線放送や SNS の BGM に作品が使われている。国立音楽大学附属中学・同附属音楽高等学校 卒業。東京音楽大学 中退。大阪芸術大学通信教育部芸術学部音楽学科 卒業。

C-2. 蘇晓宇/SUXIAOYU 「----- --... ..-. (0574)」

作品解説/Concept of Work:

本作品のタイトルは ----- --... ..-. で、数字 0574 をモールス信号に変換したものです。

この作品は、リュック・フェラーリの早期作品「ヘールシュピール」に近い性格を持っています。

創作手法では GRM プラグインを用い、EQ、モジュレーション、エコー、ディレイ、ステレオ / モノ変換と共存を試み、音像定位と物語的聴取のためのオブジェ処理を工夫しました。

全長 6 分 11 秒で、曲式構造は複三部形式に近似しています。第一部「出発」、第二部「思い出」(「幼少期」「途上」「高校時代」に細分)、第三部「到着」です。

物語は、中国出身の主人公が日本の電車で移動中に眠りに引き込まれ、夢の中で故郷の電話ダイヤル音(0574)を聞き思い出が蘇る様子を表しています。最後は、半眠半醒で目的地に到着した後、通話終了の音と共に覚醒し、この状態が現実と思い出の交錯を締めくくり、作品の物語を完結させています。

略歴/Short Biography:

2025年3月に昭和音楽大学から優等賞を受けて卒業し、その後大学院に進学しました。現在昭和音楽大学大学院、音楽表現専攻、作曲コース1年次在学。5歳より電子オルガンを始め、2018年よりサウンドデザインを始める。現在電子音楽を中心に学んでいる。中国・浙江大学寧波理工学院メディア学部卒業。中国・寧海県実験小学校音楽教師を経て、2022年に日本へ留学する。これまでに作曲をオカモトダイスケ、由雄正恒の各氏に師事。昭和音楽大学デジタルミュージックライブ(2023、2024)、昭和音楽大学第28回作曲作品発表会(2024)、昭和音楽大学2024年度卒業演奏会(僅か二人の発表者、2025)、ICSAF2024にて自作品を発表。

C-3. 永田風薫/Nagata Fuka 「錬金術の黎明/Genesis of Alchemy」

作品解説/Concept of Work:

十分に高度な技術は、魔法と区別がつかない。16世紀の科学の黎明が錬金術と称されたように、その科学が限界まで拡大された現代は、むしろ錬金術の世紀であるといえるだろう。ガルシア＝マルケス『百年の孤独』において、マコンドの創設者ホセ・アルカディオ・ブエンディアは、ジブシーから知識や器具を得て錬金術に熱中し、金の生成や磁石、望遠鏡の実験に耽るうちに狂気へと取り憑かれていく。錬金術は彼にとって自然を支配する術であると同時に、意味を変換し、隠されたものを顕在化させる営み＝文学の比喩でもある。しかしその探究は次第に実生活から乖離し、家族や共同体との関係を損なっていくことになる。やがてその果てに一族の滅びが予言される。科学と近代が狂気に飲み込まれる中で、我々の錬金術は100年後の未来までも続いていくことができるだろうか。

略歴/Short Biography:

1998年 静岡県浜松市生まれ

2017年 浜松学芸高校卒業

2021年 東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科卒業

2024年 東京芸術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了

メディアアーティスト。1998年 静岡県浜松市生まれ。2021年 東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科卒業。2024年 東京芸術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。都市空間に流れる音や音楽を扱った作品制作やエレキギターの演奏を

通して、音が持つ社会的な力や政治性について考えている。令和2年度 東京藝術大学アカンサス音楽賞受賞。2024年 やまなしメディア芸術アワード 2023-24 Y-SILVER(優秀賞)受賞。2024年 東京藝大アートフェス優秀賞受賞。2024年度浜松市鴨江アートセンターアーティスト・イン・レジデンス賞。

C-4. オウ・コウビン/WANG HANGBING 「“Caving” for fixed media」演奏/Interpreter: 檜垣智也/HIGAKI Tomonari

作品解説/Concept of Work:

この作品は Caving(洞窟探検)という言葉をもとに作られている。雨音、雷鳴、水音、人の声など、自然界の音を中心に用い、一部に電子音を加えた fixed media 作品である。「地質」という概念を表現するためノイズ的な音響処理を多用し、日常生活では想像しづらい洞窟の風景や音響空間を聴覚的に描き出している。本作品の面白さは一貫して物語性が発展するところにある。全ての音が時間の経過と共に変化し、動き、新たな音を生み出していく中で、まるで地下洞窟に身を置いているような感覚など、多くの未知の体験をするだろう。そこには危険がもたらす圧迫感、新しい生物との出会いによる好奇心、状況に対応する緊張感、そして突如訪れる終わりによる恐怖が含まれる。リスナーの脳内で音情報が処理され、音そのものを超えて映像のように動き出し、ストーリー性に満ちた情景を想像させる点が、この作品の最大の魅力である。

略歴/Short Biography:

6歳からピアノを始め、高校は浙江音楽学院附属音楽学校に進学した。大学では浙江音楽学院ピアノ専攻を卒業し、音楽理論や音楽史も学んだ。その後、洗足学園音楽大学・大学院の音響デザイン専攻に進学し、さらに学びを深めている。

C-5. ダイ・メイ/DAI MING 「The Traveling Butterfly」 演奏/Interpreter: 檜垣智也/HIGAKI Tomonari

作品解説/Concept of Work:

本作品は、蝶の「越冬のための渡り」という現象から発想を得て制作された。

蝶の渡りは、鳥のように広く知られてはいないが、小さな命が三～五世代にわたって命をつなぎ、ようやく長い旅を終えるという不思議で貴重な営みである。作品では、その旅の一場面を切り取り、一匹の蝶の視点から、羽化して飛び立ち、そして命を終えるまでの過程を描いている。人間と自然が入り混じる環境の中で、この小さな生命が出会う危険や偶然の瞬間を音で抽象的に表現した。使用した音素材の一部は、街や公園、野外などで収録した環境音である。これらの音素材にドブラー効果などの音響処理を加え、蝶が飛行中に感じる音の変化を再現した。さらに、GRM Tools の Shuffling、Shift、および Max/MSP の Granular 処理を組み合わせることで、蝶が旅の途中で遭遇する緊張感や不安定な環境を音として描き出している。

略歴/Short Biography:

中国出身。洗足学園音楽大学大学院音楽音響デザイン専攻 1 年在学。

C-6. Yu Chung Tseng 「バンブーのメタスケープ/Metascape of Bamboo」 演奏/Interpreter: 檜垣智也/HIGAKI Tomonari

作品解説/Concept of Work:

Bamboo has a high artistic conception and is often regarded as a symbol of oriental color. The composition was based on the recordings of the chaotic collisions and the random chirping sounds of bamboo. "Metascape of Bamboo" isn't about a composition to depict the sonic landscape of bamboo at a specific time and place, but rather about imbuing the work with a sense of timelessness that transcends time. Furthermore, the work also means to present the lesser-known voices of bamboo, as well as to express the Eastern humanistic connotations that bamboo can convey. The essence of the work is neither concrete nor abstract, but a metascape that oscillates between the "concrete" sound and the processed ones of bamboo, creating a sense of contrast between yin and yang, virtuality and reality in Eastern philosophy.

略歴/Short Biography:

Yu-Chung Tseng, received his DMA from University of North Texas, currently serves as a professor of electronic music composition at Institute of Music at National Yang Ming Chiao Tung University(NYCU) in Taiwan. His music has been recognized with selection/awards from Bourges Competition (Finalist, 2005), Pierre Schaeffer Competition (1st Prize in 2003, 3rd Prize in 2007), Cittadi Udine Competition (Finalist, 2006), Musica Nova Competition (1st Prize in 2010, Mention award in 2009, Mention award in 2012), Metamorphoses Competition (Finalists, 2006, 2008, 2010), ICMC 2011, 2015, 2022 Asia-Oceania Regional Best Music Award and KLANG Competition (2nd Prize, 2023).